

第9回 ヘナそうるのへや 企画展示

2020年7月31日(金)～11月2日(月)

児童書と翻訳

～世界の本を伝える仕事～

第9回 ヘナそうるのへや 企画展示

児童書と翻訳

～世界の本を伝える仕事～

児童書の翻訳はいつから始まったのか？
翻訳本はどのようにして完成するのか？
日本における「児童書」と「翻訳」の歴史を、
翻訳家としても活躍された渡辺茂男さんの
エピソードを交えて紹介します。



＜展示期間＞ 令和2年7月31日(金)～11月2日(月)
＜展示場所＞ 多摩市立図書館 本館
ヘナそうるのへや(こともしよつ内)

©Yuriko Tanawaki 1971.

目次

○児童書と翻訳・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

○翻訳本ができるまで・・・・・・・・・・・・・・・・3

○絵本の訳、物語の訳・・・・・・・・・・・・・・・・5

○直訳？意訳？誤訳？・・・・・・・・・・・・・・・・7

○翻訳家・渡辺茂男・・・・・・・・・・・・・・・・9

○翻訳家・石井桃子・・・・・・・・・・・・・・・・11

○参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・12



児童書と翻訳

クイズです！日本で最初に翻訳された児童書は何でしょうか？

・・・答えは、『ロビンソン・クルーソー』（デフォー／著）です。

『ロビンソン・クルーソー』は、嘉永元（1848）年に『^{ひょうこうきじ}漂荒紀事』というタイトルで訳された、最初の翻訳児童書です。『子どもの本・翻訳の歩み事典』によると、江戸時代に翻訳された児童書は2冊だけで、どちらも『ロビンソン・クルーソー』の物語でした。ただ、江戸時代は限られた国としか交易していません。ですから、『ロビンソン・クルーソー』はイギリスの物語ですが、『漂荒紀事』は蘭語版から訳されているようです。

また、『漂荒紀事』は草稿はありますが、実際に出版はされていません。そのため、実質的には安政4（1857）年に出版された『^{ろびんそんひょうこうきりやく}魯敏遜漂行紀略』が、最初の翻訳児童書と言えるかもしれません。しかし、江戸時代に翻訳された児童書はこの2例にとどまり、児童書の翻訳自体がまだ盛んではなかったことが伺えます。

翻訳が一気に盛んになるのは、明治時代です。西洋文化を積極的に取り入れようとした時代らしく、明治5（1872）年を皮切りに、翻訳児童書の点数も飛躍的に多くなっていきます。訳される物語もヴェルヌ、プーシキン、バーネット、グリム兄弟と様々な国の物語が増えていきます。ただ、原書から訳す以外に蘭語や英語になったものを間接的に訳したり、専門の翻訳家ではなく語学に堪能な別職業の人が訳したりすることも多かったようです。

大正時代になると、『赤い鳥』の刊行に代表されるように、より質の高い児童文学を求める動きが起こります。それにしただがって、翻訳の児童文学も比較的原書に忠実なものや、子どもにも読みやすい文体や装丁をもった翻訳児童書が登場するようになりました。

昭和に入ると、現代でも愛されている物語も次々に訳されていきます。『熊のプーさん』や『ドリトル先生「アフリカ行き」』などは、第二次世界大戦中の戦時下で訳されたものです。また、昭和初期から戦中戦後にかけては、渡辺茂男さん、村岡花子さん、猪熊葉子さんなど、児童文学を翻訳するたくさんの人が現れます。

試行錯誤の中で現代でも愛される物語が訳され、翻訳児童文学が出来上がっていくのです。

翻訳本ができるまで



STEP1「原書の情報を入手」

出版社が翻訳の候補となる原書入手。
ルートは主に5つ。著作権エージェントからの紹介、
翻訳者からの持ち込み、海外ブックフェア、
編集者が独自に発掘、出版社が契約している
スカウトからの情報のパターンがある。

STEP2「リーディングの依頼」

「これは!」という本が見つかったら、翻訳家または
リーダーとよばれる出版社以外のスタッフに
読んでもらって、その本を翻訳するべきかどうか
評価してもらう。



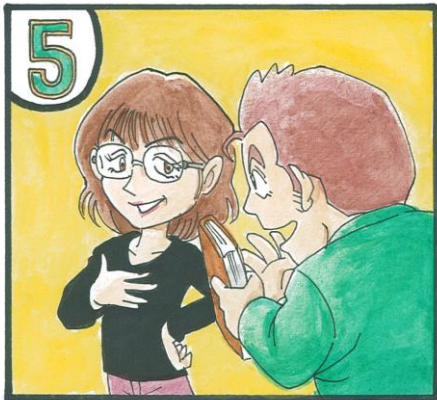
STEP3「企画会議」

リーダーの評価をもとに、出版するべきかどうか
会議で考える。「おもしろい」本だからといって、出版
されるとはかぎらない。

STEP4「著作権(著作権)の取得」

会議でOKがでると、著作権エージェントに本を
出版できる許可(※著作権)をとってきてもらう。
原書の出版社(または著者)に直接交渉することもある。



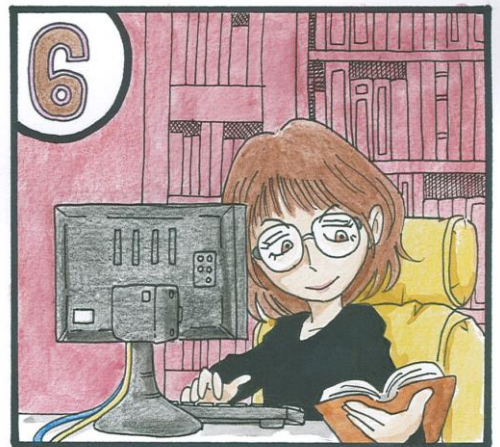


STEP5「翻訳の依頼」

著作権も取れて出版が決まると、翻訳してくれる翻訳者をさがす。作品の雰囲気やそのジャンルに詳しい翻訳者などが選ばれる。

STEP6「翻訳」

依頼を受けた翻訳者が翻訳をする。
一人で翻訳する場合が多いが、何人かで訳すこともある。作品の文体や雰囲気は翻訳者と編集者が話し合って作っていく。



STEP7「編集・校正」

仕上がった訳文を本の形にするために、レイアウトしたり、文に間違いや誤字脱字がないか確認の作業。いろんな人がかかわって、より読みやすくしていく。

STEP8「印刷・製本・刊行」

全部の文章の校正やレイアウトが終わると、いよいよ印刷・製本。新聞社やほかの出版社など各種メディアに宣伝をして、いざ、本屋さんの店頭へ！





絵本の訳、物語の訳

「翻訳者は、原作者がなにを語っているかを的確に伝えるのは当然のこと、なおそのうえに、作者がいかになにを語っているか、(中略)いかにを訳さなければ、それは小説ではなく、たんなる筋書きにすぎない。」

『翻訳家の仕事』 岩波書店編集部／編 岩波書店 より

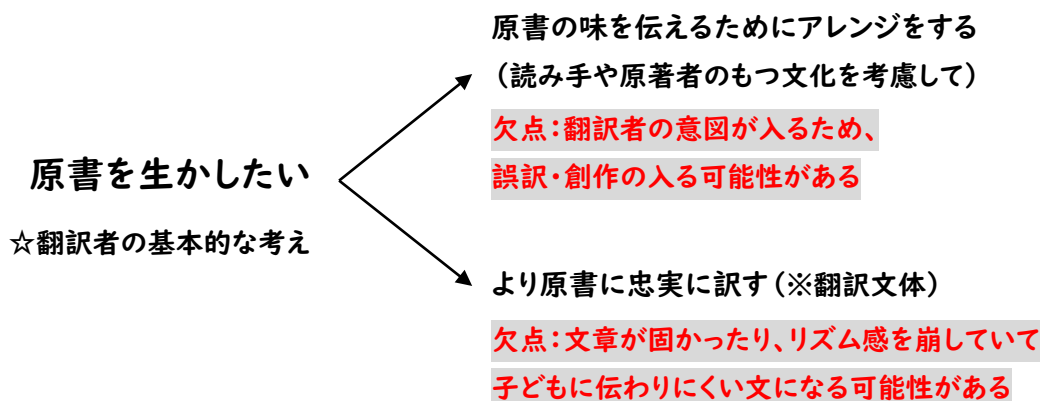
『アンネの日記』を翻訳した深町眞理子さんの言葉です。

では、翻訳者の「いかにを訳さなければ、たんなる筋書きにすぎない」とはどういう事でしょうか。それは、翻訳＝直訳ではない、というところにあります。原書を正しく訳すことは、おおよそその翻訳者の方は重要だと思われるでしょう。しかし、原書を正確に訳すだけでは、物語の面白味を壊してしまうこともあります。特に児童書の場合では、そもそも読み手である子どもたちに楽しんでもらえなかったりすることも考えられます。

また、登場人物の口調、一人称の使い方などによって、キャラクターのイメージは大きく変わります。

どのような文章や手法を用い、どのように原書を生かすのか。それが翻訳者の「“いかに”語るか」の葛藤であり、面白さになっていくのでしょう。

<主な翻訳手法とその欠点>



では、訳によって登場人物のイメージが変わるとは、いったいどんなものでしょうか。

今回は『アルセーヌ・ルパン 813 (の謎)』を2冊比較してみます。

＜813の1章で、最初にルパンが現れたシーン＞

『すると男は暖炉の上の水差しのびんをつかみ、大きなコップに水を注ぐと、ひと息に飲みほした。それからハンカチをぬらし、汗の流れるひたいをふいてから、しばりあげたケッセルバッハ氏のそばに腰をおろして、慇懃無礼な口調でこう告げた。

「ケッセルバッハ先生、やはり自己紹介させていただく必要がありますね。」』

(『813』大友徳明／訳 2005年 偕成社)

『マルコが出ていくと、男はケッセルバッハのそばへ椅子をひきよせて、どっかりすわり、

「まずこれで、じゃまものは行っちゃった。ところで、ダイヤ王殿下、まだ、名刺もさしあげませんで失礼しました。こういうものです。」』

(『怪盗ルパン全集3 8・1・3の謎』南洋一郎／訳 1996年 ポプラ社)

どうでしょう？ セリフより前の文章の長さの違いにも驚きますが、口調と文章表現で、想像するルパン像がだいぶ違ってくるのではないのでしょうか。

また、絵本の場合は絵と文字が融合している場合も多くあります。

例として、『100まんびきのねこ』(ガアグ／著)の原書は、肉筆の文字が絵の中に融合しています。そのため、より原書に近い味わいを出すための日本語を選び、演出を考えねばなりません。また、文法的にはつけない場所に句読点をつけることで、文章にリズムをつくる作家もいます。

絵本はそもそも文字数をあまり多くはとれないため、翻訳者にはひとつひとつの言葉選びのセンスが問われてきます。

このような事を踏まえると、翻訳者として求められる重要な能力というのは、原書の言語に堪能であること、日本語をよく知っていること、なお且つそれを選び当てはめる能力があること、といえるのではないのでしょうか。



『100まんびきのねこ』

ワンダ・ガアグ／ぶん・え

いしいももこ／やく

福音館書店



直訳？意訳？誤訳？

『がたがたの竹馬小僧』とはどんな物語だと思いますか？

実は、グリム童話でおなじみの『ルンペルシュティルツヒェン』です。先に紹介した『魯敏遜漂流記略』もそうですが、明治～大正期の翻訳は、現代の私たちが見て驚くような翻訳も存在します。これは一つには、初期の翻訳はなるべく多くの単語を日本語にしようとしたということにあり、当時訳した人の苦心が感じられます。

翻訳は時代によってずいぶんと違いが出てきます。その結果、時代と共に子どもたちの語彙や常識が変わることで、翻訳をしない作品も出てきます。

最近の例では、『ツバメ号とアマゾン号』（ランサム／著）を翻訳された神宮輝夫さんが52年を経て再度訳し、新版が出版されました。神宮さん曰く、かつては訳さなければならなかった単語が、今はカタカナ語として通用するようになって、かつて訳した単語の方が今の子どもたちにわからなくなっている場合があるそうです。

では、『ツバメ号とアマゾン号』より一部分を抜粋し、1979年版（初版1958年）と2010年版で翻訳の仕方がどのように違っているかを比べてみましょう。

<1章 デリアンの頂上より>

『スーザンは、パンにママレードをぬっていた。ティティはひざ小僧をかかえて、あごをのせ、湖に面した崖つぶちの二本の木の間にすわって、見張りしながら、島をながめていた。

ジョンがロジャを見あげて、電報を見た。ジョンは、たき火をすててとび立った。

「ウナ電？」と、ジョンがきいた。

「返事だよ。」と、ロジャが答えた。』

（1979年版）

『スーザンは、パンにママーレードをぬっていた。ティティはひざこぞうをかかえて、あごをのせ、湖に面した崖の端の二本の木の間にすわって、見張りしながら島をながめていた。

ジョンは、ロジャを見あげて電報に気がつく、と、さっと立ち上がって、たき火をはなれた。

「至急電報？」と、ジョンがきいた。

「返事だよ。」と、ロジャが答えた。』

（2010年版）

はっきりわかるのは「ウナ電」が「至急電報」に変わっているところです。電報に気が付いたジョンの行動にも、少し手が加えられています。

他にも1979年版では「帆柱」となっていた単語が「マスト」になっていたり、「種入り菓子」が「シードケーキ」に、「コーヒー茶碗」が「マグ」になっているなど、用語にはいくつも変更がみられます。

この本は、同じ翻訳者の方が時を経て訳したという、面白い一冊です。ぜひ手に取って、その違いを読み比べてみてはいかがでしょうか。



『ツバメ号とアマゾン号 上』

アーサー・ランサム／作

神宮輝夫／訳

岩波書店

また、神宮さんは2011年国際子ども図書館の講義では次のような言葉を残されています。

「パソコンの使用率が増えた中で表現が平均化されたことにより、読みやすいけれども個性のない翻訳が非常に多くなってきているのではないかということが、最近の翻訳で今一番私が心配しているところです。」

「いつまでも翻訳されていく本は、普遍的な価値があると考えればよろしいかと思います。」





翻訳家・渡辺茂男

『もりのへなそうる』の著者である渡辺茂男さんも、著作と同時にたくさんの翻訳を手掛けています。『エルマーのぼうけん』や『おさるのジョージ』など、お子さんはもちろん、大人の方でも子どものころに読んだ方も少なくないのではないのでしょうか。

渡辺さんは慶応義塾大学を卒業後、アメリカのウエスタン・リザーブ大学を経てアメリカの公共図書館で数年間児童図書館員として働かれていました。『エルマーのぼうけん』は、その経験の中で子どもたちにとっても愛されている物語として出会い、日本の子どもたちともこの物語の面白さをわかちあいたいと翻訳を始められたそうです。

渡辺さんは『エルマーのぼうけん』を訳す時、原書では擬人化された動物の性別や年齢などが分からず、苦心されたそうです。しかし、この物語はたくさんの動物が軽妙にしゃべるところがとても面白い部分であるとも考えていたようです。

これについて、渡辺さんは次のように語っています。

「私は、何冊かイギリスやアメリカの子どもの本を日本語に翻訳しましたが、『エルマーのぼうけん』ほどたのしく仕事のできた本はほかにありません。それと同時に、この物語ほど苦心して翻訳したものも他にありません。」

また、1990年のJBBYの諫早大会では、翻訳について次のような言葉を残されています。

「翻訳をする時に、知らない外国の土地へ旅した自分もそうだと思います。創作の場合と同じように原作者が想像した世界に入っていくことです。声が聞こえ、体臭がにおってくるまで読んで、読んで、読みます。絵を読み、文字を読み、物語を読み、空間を読むのです。それから、その世界の中に浸り込んだ自分が、自分の言葉で語りだすのです。日本の子どもたちに向けて。訳者は、外国語を読みながら、自分の感性で異質の世界へ入ったら、外へ向かって、この世界はこうなんだよと、日本語で語ることなんですね。ですから日本語ができないと、いけないと思います。何よりも日本語が大事です。外国語の世界に入るには、日本語と外国語の本質的な相違が築いている壁をどうやって通り抜けていくか、想像力と感性の問題で、これもやはり、創作の場合に通じると思います。」

『子どもの本 一書くときつくるとき JBBY 子どもの本 諫早大会講演録一』

渡辺茂男・松居直／著 諫早子どもの本の会 より

では、渡辺茂男さんが訳された『エルマーのぼうけん』の一部分を原文と訳文で比べてみましょう。

<「エルマーライオンにあう」より>

『“Where do you think you are going?”

“I’m going home,” said my father.

“That’s what you think !” said the lion.

“Ordinarily I’d save you for afternoon tea, but I happen to be upset enough and Hungry enough to eat you right now.”』

『「おまえは、どこへいくつもりだ？」

「ぼく、うちへかえるところです。」と、エルマーはこたえました。

「そうはとんやがおろさんわい。」と、ライオンがいました。

「ふつうなら、ごごのおちやのじかんにとつとくのだが、ちょうどはらをたてたんで、おれさまは、はらぺこだ。おまえをくうのに、おあつらえむきだ』

これはライオンとエルマーの会話部分の抜粋なのですが、原文を見ると一人称はすべて「I」なのに対し、訳された文ではエルマーは「ぼく」、ライオンは「おれさま」と使い分けられています。他にも「I」は「わし」「わたし」などのバリエーションがあり、登場人物のキャラクターをより面白いものにしています。

また、原書の“‘That’s what you think!’”は直訳すると「あなたがそう思うなら」というような意味合いになるので、それを「そうはとんやがおろさんわい。」とリズムカルに訳しています。



『エルマーのぼうけん』

ルース・スタイルス・ガネット／さく

ルース・クリスマン・ガネット／え

わたなべしげお／やく

子どもの本研究会／編集 福音館書店



翻訳家・石井桃子

渡辺茂男さんと親交のあった石井桃子さんもまた、日本を代表する翻訳家の一人です。最初の訳書である『熊のプーさん』をはじめ、『ピーターラビットのおはなし』など多くの児童書の翻訳を手掛けました。

お二人は慶応義塾大学の日本図書館学校で知り合い、子どもの本の研究会「いすみ会」に共に参加されていました。1964年にはリリアン・スミスの『児童文学論』を石井桃子、渡辺茂男、瀬田貞二との共訳で出版しています。

渡辺茂男さんと知り合った頃、石井桃子さんは岩波書店に勤務されており、『岩波少年文庫』など子どもの本の編集や執筆に携わっていました。退社後も、アメリカやイギリスなどを視察し、海外における充実したサービスを日本にも取り入れようと積極的に活動されました。

お二人が手掛けた数々の児童文学作品は、今でも多くの子どもたちに愛され続けています。

さて、ここまで様々な翻訳・翻訳家についてご紹介してきました。

普段、私たちは小説を読む時、翻訳家を意識することはあまりないかもしれません。しかし言語はもちろん、生まれ育った環境、文化、歴史、風土、すべてが異なった原著者の綴る物語を、まるで日本語で書かれた小説を読むように楽しむことができます。それは、翻訳家の方々の努力と苦心のおかげなのだと、今回の特集を通じて感じていただければ幸いです。



<参考文献>

- 『図説子どもの本・翻訳の歩み事典』 子どもの本・翻訳の歩み研究会／編
柏書房 R993 2002 年
- 『翻訳家の仕事』 岩波書店編集部／編 岩波書店 801.7 2006 年
- 『子どもの本 -書くときつくるとき JBBY 子どもの本・諫早大会講演録-』
渡辺茂男・松居直／著 諫早子どもの本の会 992 1991 年
- 『通訳者・翻訳者になる本』 イカロス出版 S801.7 2020 年
- 『翻訳者の仕事部屋』 深町真理子／著 飛鳥新社 801.7 2001 年
- 『児童文学最終講義』 猪熊葉子／著 すえもりブックス 990 2001 年
- 『翻訳の秘密』 小川高義／著 研究社 904 2009 年
- 『わが青春(複製資料)』 渡辺茂男／著 多摩市立図書館 994 W 1989 年
- 『ツバメ号とアマゾン号 上』アーサー・ランサム／作 岩田欣三／訳 神宮輝夫／訳
岩波書店 92 ラ 1979 年
- 『ツバメ号とアマゾン号 上』アーサー・ランサム／作 神宮輝夫／訳
岩波書店 92 ラ 2010 年
- 『813 完訳版』モーリス・ルブラン／作 大友徳明／訳 偕成社 92 ルフ 2005 年
- 『怪盗ルパン全集3 8・1・3 の謎』
ルブラン／原作 南洋一郎／訳 ポプラ社 92 ルフ 1996 年
- 『100まんびきのねこ』ワ ندا・ガアグ／ぶん・え いしいももこ／やく
福音館書店 E7 1961 年
- 『小人、怪物、大男』ヤーコプ・グリム&ヴィルヘルム・グリム／著 天沼春樹／訳
パロル舎 F2 クリ 2001 年
- 『エルマーのぼうけん』
ルース・スタイルス・ガネット／さく ルース・クリスマン・ガネット／え
わたなべしげお／やく 子どもの本研究会／編集 福音館書店 92 カ 2010 年
- 『MY FATHER'S DRAGON』
RUTH STILES GANNETT RANDOM HOUSE 83J 1986 年

第9回 へなそうるのへや 企画展示

『児童書と翻訳～世界の本を伝える仕事～』